

キリスト教理解のために



2004年3月

ワイズメンズクラブ国際協会
西日本区

キリスト教理解のために

少し古い統計(1998年)で申し訳ありませんが、西日本区のワイズメン1738名中、クリスチャン(信仰告白をし、洗礼を受けた方)の割合は378名、21%です。

最もクリスチャンの方の多いクラブは約70%、最も少ないクラブは0%という数字があります。

また、西日本区の約3割を擁し、最も元気で活動的な京都部では、クリスチャンの方は4%でしかありません。これは何を意味するのでしょうか。

誤解されると困るのですが、このことで「クリスチャンが少ないのはけしからん。問題だ」ということを申し上げようとしているものではありません。

つまり、ワイズにおけるキリスト教理解の問題は、このような現況を理解した上での“クリスチャン”の方に投げかけられている問題だということです。

「あたりまえのこと」と、キリストの教えについてよく説明や理解への努力をしないままの“祈りや讃美歌”“キリスト教理解とキリスト教信仰の混同”等、このようなことがキリスト教理解への敷居を高くし、一部では拒否反応まで生んでいるのではないのでしょうか。

幸い、西日本区では理事や役員の方のご理解のおかげで、ここ数年、区の研修会では「キリスト教」と正面から取り組み、それなりの評価をいただいています。

そのような働きの中から「ワイズを知ったおかげで『キリストの教え』という素晴らしい出会いがあった」と言っていただけるワイズであるためにと「西日本区クリスチャニティー特別委員会」が発足いたしました。そして協同作業を行い、ワイズにおけるキリスト教理解を、誰にでも「なるほど!」と言っていただけることを目指した「指針」と、ごく基本的な「解説」そして「モデル祈祷」を作成いたしました。

ご高覧いただき、少しでもご参考にしていただき、そしてご意見を賜りましたら、こんなに嬉しいことはございません。

西日本区と全てのクラブ、全てのワイズメンの方々の上に、神様の祝福と恵みがありますことを、心からお祈りいたします。

2004年3月

西日本区クリスチャニティー特別委員会

委員長 長井 潤 (名古屋)

委員 杉井 恭敏(京都バレス) 永井 康雅(和歌山紀の川)

卜田 啓三(大阪豊中) 福田 宏子(宝塚)

三浦 克文(岡山) 田上 正 (熊本むさし)

チャプレン 西村 清 (名古屋)

「キリスト教理解のために」 発刊によせて

2003～2004西日本区理事 大野 嘉宏

このたび「キリスト教理解のために」の発刊ができましたことを共に喜びたいと思います。

ワイズメンズクラブが他の奉仕団体と異なる大きな特徴の一つに、国際憲法と西日本区定款に明示されている「イエス・キリストの教えに基づき」「イエス・キリストが示された愛と奉仕の実践を目指す」ということがあります。

このことの意味するところを、西日本区ワイズメンの方々に、どのように理解していただけるかということは、私にとっても大切な課題でした。

私達ワイズメンズクラブの生みの親でありますポール・アレキサンダー判事は、その書簡の中で、「イエス・キリストの教えとは、キリストの論理的な教えということの意味し、自分の救い主として受け入れるという神学的な信条を意味するものではありません。……ワイズメンであることは、人々がなにを信じるかによるのではなく、何をなすかによるものであります。」と明解に語られています。

また、「もしYMCAが、その門戸を開き、自分の宗教としてイエス・キリストを受け入れなくても、その教えを実践しようとする人が会員になることを認めないとなれば、自らを傷つけ、この世界で大切な役割を果たしてゆくことが出来なくなってしまうでしょう。」と、宗教的に開かれた団体であることも強調されています（詳細は、ワイズ必携P.120参照）

私は、この度示されました「指針」は、ワイズメンズクラブにおける「キリスト教の理解」ということに対して、このポールアレキサンダー判事の意を含んだ、明解な回答であると思っています。

この「指針」が契機となって、それぞれのクラブで「楽しく」相互理解のもとに、よりよい世界の実現のため、愛と奉仕の活動を展開されますことを願ってやみません。

発刊に至りました多くの方々の祈りと努力、そしてクリスチャニティー特別委員会のお働きに心から感謝申し上げます。

発刊によせて

2002～2003西日本区理事 白井 征郎

このたび「キリスト教理解のために」の発刊にあたりまして、「クリスチャニティー特別委員会」のお働きに大変感謝申し上げます。

ワイズメンズクラブも会員を広く社会の中から求めるようになり、ワイズ活動の大切な精神であり、国際憲法や西日本区定款の目的・モットーで定められている「イエス・キリストの教え」について、それまでキリスト教とあまり接点のなかった方々に説明し、ご理解をいただく必要がより求められるようになりました。

また、ワイズアカデミー委員会が中心となって進めてきました研修会では、むしろクリスチャンでない方々からの求めで、「ワイズとキリスト教」ということについて、これまでになく積極的に取り組んでいただきました。

このような流れの中から、キリスト教とワイズメンズクラブの関係、また、YMCAとワイズメンズクラブ活動の根幹となっています「イエス・キリストの教え」について、誰にでも基本的な理解をいただけるような「指針」を西日本区として提示することは必然のことでした。

勿論これらのことは大変に大切なことなので、今まで多くの先輩や先生方が優れた文章や資料としてまとめ、教えて下さっていますが、具体的な「指針」として示されたことはありませんでした。そのような意味からは画期的なことだと思います。

個人的なことですが、私もこの「指針」を読み、なんだか今までモヤモヤしていたものが、スッキリしたような感を持っています。皆様はどのようにお感じになられるでしょうか。

キリスト教理解のための小冊子発刊にあたり、「クリスチャニティー特別委員会」の設置が承認された時の理事として、今後それぞれのクラブで生かされることを願ってやみません。

発刊によせて

2002～2003西日本区理事 白井 征郎

このたび「キリスト教理解のために」の発刊にあたりまして、「クリスチャニティー特別委員会」のお働きに大変感謝申し上げます。

ワイズメンズクラブも会員を広く社会の中から求めるようになり、ワイズ活動の大切な精神であり、国際憲法や西日本区定款の目的・モットーで定められている「イエス・キリストの教え」について、それまでキリスト教とあまり接点のなかった方々に説明し、ご理解をいただく必要がより求められるようになりました。

また、ワイズアカデミー委員会が中心となって進めてきました研修会では、むしろクリスチャンでない方々からの求めで、「ワイズとキリスト教」ということについて、これまでになく積極的に取り組んでいただきました。

このような流れの中から、キリスト教とワイズメンズクラブの関係、また、YMCAとワイズメンズクラブ活動の根幹となっています「イエス・キリストの教え」について、誰にでも基本的な理解をいただけるような「指針」を西日本区として提示することは必然のことでした。

勿論これらのことは大変に大切なことなので、今まで多くの先輩や先生方が優れた文章や資料としてまとめ、教えて下さっていますが、具体的な「指針」として示されたことはありませんでした。そのような意味からは画期的なことだと思います。

個人的なことですが、私もこの「指針」を読み、なんだか今までモヤモヤしていたものが、スッキリしたような感を持っています。皆様はどのようにお感じになれるでしょうか。

キリスト教理解のための小冊子発刊にあたり、「クリスチャニティー特別委員会」の設置が承認された時の理事として、今後それぞれのクラブで生かされることを願ってやみません。

クラブブリテン掲載のための「聖書のことば」とその解説

ここに抽出して、解説を併記した「聖書のことば」は、毎月のクラブブリテンに利用していただけるように作成いたしました。

「聖書のことば」やその解説を掲載していなかったり、毎月聖書の言葉を選んで解説してくださる方が特におられないクラブにご利用いただけると幸いです。

これらのほとんどは、教職(牧師や専門教育を受けた人)ではなく、平信徒が分担して作成いたしました。ですから、その点の至らなさはお許し下さい。

どれを、どんな順序でお使いいただいてもご自由です。また、スペースに応じて「聖書のことば」の一部分を掲載いただいたり、解説の文章の長さを多少変えていただいても結構です(ただその場合は出来るだけよく読んでいただき主旨が伝わるように工夫して下さい)

ワイズメンズクラブにおきまして「イエス・キリストの教えられたことを知りその教えを理解する」ということは、とても大切なことです。このことは決してキリスト教を強要するものではありません。

理解のための第一歩として「聖書のことば」に触れ、その意味するところを学ぶ、そのことの一助としてご利用下さい。

ワイズメンズクラブ国際協会西日本区
クリスチャニティー特別委員会

「聖書のことば」抜粋とその解説

主は羊飼ひ(賛歌。ダビデの詩)

主は羊飼ひ。わたしには何も欠けることがない。

主はわたしを青草の原に休ませ 憩いの水のほとりに伴い 魂を生き返らせてくださる。

主は御名にふさわしく わたしを正しい道に導かれる。

死の陰の谷を行くときも わたしは災いを恐れない。

あなたがわたしと共にいてくださる。

あなたの鞭、あなたの杖 それがわたしを力づける。

旧約聖書詩篇23章 1～4 節

ここには私たち(羊)の羊飼ひである神様が、私たちの人生をともに歩んでくださり、私たちを守り、励まし、慰め、安らぎを与え、とこしえまで導いてくださるということが述べられています。その信仰によって、私たちはどんなに年老いても、死ぬ時が間近であっても、希望と力が与えられたり、平安に生きることができるのです。神様は永遠に私たちと共に生きてくださいますから、主に委ねて生きる限り私たちの人生はますます豊かなものにされてゆくのです。

何事にも時がある

何事にも時があり 天の下の出来事にはすべて定められた時がある。

生まれる時、死ぬ時 植える時、植えたものを抜く時

殺す時、癒す時 破壊する時、建てる時 泣く時、笑う時

嘆く時、踊る時、石を放つ時、石を集める時

抱擁の時、抱擁を遠ざける時 求める時、失う時 保つ時、放つ時

裂く時、縫う時 黙する時む、語る時 愛する時、憎む時

戦いの時、平和の時。

旧約聖書コヘレトの言葉 3 章 1～8 節

ここには「全てのことは、神の御手の中にある、神は、何事でも起こるすべてのことに時を定められる。今は不正に見えることも、未来においてそれが必要な出来事であったことが分かる。」と述べています。私たちには、決断を迫られる時が、数多く与えられます。その時が、神様から与えられた時なのです。私たちは神様を信じて、良心に従って決断していきたいものです。

人はパンだけで生きるものではない

人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる。

新約聖書マタイによる福音書4章4節

イエス・キリストが荒野で40日40夜断食をされ、空腹になった時「もしあなたが神の子なら、ここにある石ころがパンになるように命じたらどうだ。」と誘惑を受けたことに対して答えられた有名な言葉です。

私たちにとってパンやお金は、日常生活に必要なものです。少しお金がなくなると、不安になったり、いらいらしたりしないでしょうか。時には、富のことで大切な人を傷付け「隣人愛」から目をそむける誘惑に陥ります。しかし、神様はイエス・キリストを通し、人はパンだけで生きるのではなく、神様から出る言葉によって生かされているということを教えられました。

あなたがたは地の塩、世の光である

あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の約にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。また、ともし火をともして灯の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。

新約聖書マタイによる福音書5章13～16節

イエス・キリストはキリストに連なろうとする者には「この地と世に、塩・光として働きかける使命がありますよ」と言われています。塩は食物の腐敗を防ぎ、しかも少量でその特性によって、あらゆるものにすばらしい味付けをする、必要不可欠なものです。光は闇を照らし、行く道を示し、希望を与えます。私たちは自分では光を発することはできませんが、神様から発せられる光を反射すれば、どんなに小さな光でも周りを明るくすることができます。塩は固まりのままではなく、食物と混じってこそ味付けし、光は他を照らしてこそ、その真価が発揮されます。

祈り求めなさい

求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。誰でも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。

新約聖書マタイによる福音書7章7～8節

ここで言われている「求める・探す・たたく」は、たんなる人間的な願望や欲望を得るためではありません。心から神を信頼し、信仰をもって祈る時に、神様はそれを与え、見つけ出させ、聞いてくださいます。それをされるのは神様の業です。私たちは理想の実現のために、求め続け、祈り続けなければなりません。そして、もっともふさわしい時に、祈りは聞かれます。

イエス・キリストはいつも共におられる

二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にあるのである。

新約聖書マタイによる福音書18章20節

新約聖書マタイによる福音書28章20節に、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」と約束されています。二人また三人で集まる時には、いわば見えざる客としてイエス・キリストも共におられる、ということの意味しています。イエス・キリスト(神)が共にいてくださる。これほど力強いことがあるでしょうか。ワイズの例会でも会の初めに祈るのは(開会の祈祷)そのためです。

はっきり言うておく。あなたがたが地上でつなぐことは、天上でもつながれ、あなたがたが地上で解くことは、天上でも解かれる。また、はっきり言うておくが、どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心をつなげて求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる。二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にあるのである。

新約聖書マタイによる福音書18章18～20節

ワイズメンズクラブ西日本区定款にあるように「イエス・キリストが示された愛と奉仕の実践を目指す」クラブなら、「イエス・キリストの教え」を大切にするクラブなら、当然のこととして、そこには主イエス・キリストが「共にいて」くださいます。このことは集まる人達がキリスト教を信仰しているとか、していないといったことを越えた、神の摂理です。YMCA やワイズの働きには、いつもイエス・キリストが共にいて見守って下さり、心一つにして願うことは、きっと神様がかなえてくださいます。これほど心強いことがあるでしょうか。

隣人愛

イエスは言われた。「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。「隣人を自分のように愛しなさい。」律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。」

新約聖書マタイによる福音書22章37～40節

当時の聖書の専門家から、聖書の中で最も大切な戒めは何か、とイエス・キリストが聞かれた時に答えられた言葉です。この聖書の箇所は多くのキリスト教主義の学校で、「敬神愛人」とか「愛神愛人」というスクール・モットーの根拠にしている箇所です。同時にユダヤ教でもシェマという信条の一部で、ユダヤ人が礼拝の最初に唱えるもので、またユダヤ人の子供が最初に暗記する聖書の言葉でもあります。また「心を尽くし……」の所はまさに YMCA の BODY, MIND, SPIRIT の基本理念と通じるものがあります。いわば YMCA 人に言われている言葉と言っても過言ではありません。しかも「隣人を自分のように愛する」生き方は、まさに YMCA でも実践してきた事です。心にとめたいと思います。

皆に仕える

そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では、支配人と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕えられるためにではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を捧げるためにきたのである。」

新約聖書マルコによる福音書10章42～45節

ワイズや YMCA では「人が役職を選ぶのではなく、役職が人を選ぶ」とか、「ワイズで一番偉い人は、一番働く人である」と言われています。まさに、この聖書の言葉から生まれた名文句でありましょう。ワイズや YMCA の中で重責を担う人は、ほとんどが職場でも日常生活でも多くの仕事を抱えています。重要な仕事は最も忙しい人にお願いすればよい、といったビックリするようなことも良く聞く言葉です。神様は「皆に仕える者」になることを望んでおられます。私たちは愛と奉仕のクラブに属しています。私たちも一人一人が神様の教えを理解し、できるだけ「皆に仕える者」になりたいものです。

祈り求めなさい

求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。誰でも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。

新約聖書マタイによる福音書7章7～8節

ここで言われている「求める・探す・たたく」は、たんなる人間的な願望や欲望を得るためではありません。心から神を信頼し、信仰をもって祈る時に、神様はそれを与え、見つけ出させ、聞いてくださいます。それをされるのは神様の業です。私たちは理想の実現のために、求め続け、祈り続けなければなりません。そして、もっともふさわしい時に、祈りは聞かれます。

イエス・キリストはいつも共におられる

二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。

新約聖書マタイによる福音書18章20節

新約聖書マタイによる福音書28章20節に、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」と約束されています。二人また三人で集まる時には、いわば見えざる客としてイエス・キリストも共におられる、ということの意味しています。イエス・キリスト(神)が共にいてくださる。これほど力強いことがあるでしょうか。ワイズの例会でも会の初めに祈るのは(開会の祈祷)そのためです。

はっきり言うておく。あなたがたが地上でつなぐことは、天上でもつながれ、あなたがたが地上で解くことは、天上でも解かれる。また、はっきり言うておくが、どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心を一つにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる。二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。

新約聖書マタイによる福音書18章18～20節

ワイズメンズクラブ西日本区定款にあるように「イエス・キリストが示された愛と奉仕の実践を目指す」クラブなら、「イエス・キリストの教え」を大切にするクラブなら、当然のこととして、そこには主イエス・キリストが「共にいて」くださいます。このことは集まる人達がキリスト教を信仰しているとか、していないといったことを越えた、神の摂理です。YMCA やワイズの働きには、いつもイエス・キリストが共にいて見守って下さり、心一つにして願うことは、きっと神様がかなえてくださいます。これほど心強いことがあるでしょうか。

迷える羊

あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで探し回らないだろうか。そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、「見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください。」と言うであろう。言うておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。

新約聖書ルカによる福音書15章4～7節

日頃、私たちは多くの欲望を持って生きています。あれも欲しい、これもしたい、あれを手にいれたら次はこれ、と、際限なく続きます。その欲望が聖書に照らして「善し」とされるものなら良いのですが、そうでないものも時にはあります。様々な欲望に対して、自分を押さえることができず、時には犯罪を犯してしまうこともあります。また、将来に対する不安を持つこともあり、さまざまな悩みを持ちます。これらは人間の弱さから来ているのです。聖書はそのことに気付かせてくれます。私たちはいろいろな意味で、迷う羊ではないでしょうか。そして迷路に入ってしまった一人の人間を、イエス・キリストは捜し出そうと、私たちに呼びかけて下さる姿を、この譬えは語りかけてくれています。

放蕩息子

またイエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。弟の方が父親に、「お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください」と言った。それで父親は財産を二人に分けてやった。何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄遣いしてしまった。……」

新約聖書ルカによる福音書15章11～13節(32節まで)

イエス・キリストが語られた有名な「放蕩息子」の譬え話の前半部分です。是非お手もとの聖書を開いて32節まで読んで下さい(新共同約聖書139頁)

この話は、今日の日本でも時々新聞記事に載っているようです。親子の断絶、甘い親父、兄弟間の不和、わがままな人達が垣間見えてきます。何もかも使い果たし、食べることさえ困り果てた時になって、下の息子は我に返るのです。ここにイエス・キリストの導きがあり、神の声に耳を傾けることができたのです。そして父のもとに帰り、言います「お父さん、私は天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。」と、それに答えて父親は言います。「食べて祝おう。この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。」

神の愛

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

新約聖書ヨハネによる福音書 3章16節

日本におけるキリスト教主義学校の草分けである「同志社」の創立者、新島襄の愛唱した聖書の言葉の一つです。神はいかにこの世を愛されているか、どれほど私たちを愛されているか、そのことはたった独り子であるイエス・キリストを私たちのためにお遣しになったことによって明白です。私たちが意識しようが意識しまいが、私たちはいつも神の愛の中に生かされているのです。これほど素晴らしいことがありますでしょうか。

イエス・キリストの愛

そこへ律法学者たちやファリサイ派の人々が、姦通の現場で捕らえられた女を連れてきて、真ん中に立たせ、イエスは言った。「先生。この女は姦通をしているときに捕まりました。こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうかお考えになりますか。」イエスを試して、訴える口実を得るために、こう言ったのである。

新約聖書ヨハネによる福音書 8章3～6節

この場面では、人生の辛酸をなめつくした一人の女性を通して、イエス・キリストの愛が語られています。姦通罪の現場にいてなんら言い逃れできない、弱い立場の女性。きっとその日の食べ物のために罪を犯したのでしょう。聖書ではこのように最も小さく立場の弱い人間を登場させて、イエス・キリストの愛が語られています。イエス・キリストはこの時こう言われました。「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者がまず、この石を投げなさい。」なんと鋭い言葉でしょう。女性の周りにいる律法学者も、律法至上主義のファリサイ派の人間も、全部罪人であることを知らしめたのです。その場の人々は自分の胸に手を置いて考えたことでしょう。「わたしには石を投げる資格はない」と。自分が生きているが故に、自分が不完全であるが故に、罪の自覚は大切なのです。そんな罪人の私たちに、イエス・キリストは招いてくださいます。

互いに愛し合なさい

わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。

新約聖書ヨハネによる福音書15章12～13節

私たちは互いに愛し合うために世に遣わされているにもかかわらず、時には互いに競い合い、口論し合い、反目し合うために遣わされているのかのごとく生きています。私たちがこの世に遣わされているのは、友を愛するとはどんなことなのかを、私たち自身の生活によって示すために遣わされているのです。ここにイエス・キリストの偉大な主張の一面があります。私たちは何か大変なことを要求する人に対して本能的に「何の権利があって、私たちが互いに愛し合うように要求するのか」と尋ねてしまいましたが、イエス・キリストは「友のために命を捨てるのに勝る大きな愛を示すことは誰にもできない。しかし、わたしは友のために命を捨てた。」と答えられるでしょう。イエス・キリストは、まずご自身が成就されたことを、人々に要求されたのです。

すべての人を一つにして下さい

父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちの内にいるようにしてください。そうすれば、世は、あなたがわたしをお遣わしになったことを、信じるようになります。

新約聖書ヨハネによる福音書17章21節

YMCA がもっとも大切な言葉としている聖書の箇所です。これはイエス・キリスト自身が我々のために、「一つになるように」というとりなしの祈りです。イエス・キリストは、父なる神とその独り子が一体であるのは、「愛と服従」によるということを示して下さいのです。我々は本来考え方や生き方も異なります。我々人間は、分裂の方が一致する事より自然です。しかしこれらの相違を超克し互いに愛し合う中に、神による一致が生まれてくるのです。そのことによって、我々の姿、行為を見て、人々が我々の中に神の姿を見るようになるのです。ワイズメンはそのような働きを期待されているように思うのです。

信仰により苦難を希望に

そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられる生霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。

新約聖書ローマの信徒への手紙5章3～5節

イエス・キリストが十字架につけられ、死んで復活された後、ちりぢりになったキリストの弟子たちは結束してキリスト教の伝道をいたしました。それを引き継ぎ、キリスト教を新しい世界に広め、信仰のありかたの基盤をつくったパウロが、ローマの教会の人に当てた手紙の中に書かれた言葉です。

当時のローマではキリスト教徒であることは大変困難なことで、あらゆる迫害と抑圧が彼等を襲いました。しかし「その苦難が不屈の精神を伴う時、人生の戦いを通して、人はより強く、より深く、美しくなって神に一層近づき、試練に耐えた練達はいつも希望を生み出す。イエス・キリストはそんな私たちのために死んで、愛を示されました。」と励まされたのです。

わたしたちは互いに体の部分である

わたしたちに与えられた恵みによって、あなたがた一人一人に言います。自分を過大に評価してはなりません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の度合いに応じて慎み深く評価すべきです。というのは、わたしたちの一つの体は多くの部分から成り立っていても、すべての部分が同じ働きをしていないように、わたしたちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分なのである。

新約聖書ローマの信徒への手紙12章3～5節

キリスト教をユダヤの一地域から世界にまで広めた立役者パウロが、体の全体と部分の関係为例にあげ「我々はそれぞれ独自の機能を持っている。また与えられた賜物(能力等)もそれぞれかけがえのない働きをしているように、私たち一人一人もまた、かけがえのない存在である。優越感を持つこともなく、また卑下することもない。また、人を批判することなく、あるいは自分の果たす貢献を知られなくても、賞賛されなくても、その貢献そのものが尊いことだと知るべきである。」と、ローマの教会の信徒への手紙の中で論じられた言葉です。

愛は最も大切なもの

愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を尊ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。愛は決して滅ばない。

新約聖書コリント信徒への手紙—13章4～8節

聖書の中の「愛」の記述として、最も有名な箇所の一つです。イエス・キリストが十字架につけられ、死んで復活された後、ちりぢりになったキリストの弟子たちは結束して、キリスト教の伝道をいたしました。それを引き継ぎ、キリスト教を新しい世界に広め、信徒のありかたの基盤をつくったパウロが、コリントの教会の人に宛た手紙の中に書かれた言葉です。ここにはキリスト教の持つ十五の愛の特徴が列記されています。信仰と希望は大いなるものであるが、愛はさらに大いなるものであり、愛は信仰を燃やす火であり、希望を現実に変える光であり、最も大切なものだと、愛を説いています。

神の愛による教え—愛し合うこと

わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を贖ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。愛するものたち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。

新約聖書ヨハネの手紙—4章10～11節

愛はキリスト教において、最も大切なことの一つです。なぜなら「神は愛です。(新約聖書ヨハネの手紙—4章16節)」神の愛(アガペー)は決して絶えることはありません。神は、独り子イエス・キリストを、私たちの罪を贖ういけにえとしてこの世にお遣わしになるほど、この世を愛してくださいました。そして神への愛は、神に愛され、イエス・キリストに愛されたように、互いに愛し合うことです。

ぶどうの木のたとえ

わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。 新約聖書ヨハネによる福音書15章5節

パレスチナでは、ぶどうの木の下に住むことは、平安・繁栄の象徴でした。また、ぶどうの豊かな実りは、神の祝福をうけた家庭の繁栄を表しました。(旧約聖書詩篇128篇)

イエス・キリストはご自身をぶどうの木、私たちをその枝、天の父なる神を農夫に譬え、人がイエス・キリストにつながっており、イエス・キリストも人につながっていれば、その人は豊に実を結ぶ。ぶどうの枝が、木につながっていなければ、実を結ぶことができない。実を結ばない枝は皆、農夫である父なる神が取り除かれると話され、信仰を持って生きる生き方を示されました。

キリスト教でよく使用される用語とその解説

【証し】

イエス・キリストが神から遣わされ、人間の罪を贖うために十字架につけられ、死んで復活されたこと。これらを踏まえた自分の信仰を、人の前で語ること。

【アーメン】

祈りや、讃美歌のあとに言われる「アーメン」という言葉は、イエスの時代のその地方の言葉で「真実です」「誠です」「本当です」との意味です。ですから、祈りや歌の内容に対して「そうだ、ほんまや」と賛同を表す言葉で、キリスト教の呪文のようなものではありません。

【安息日】

「天地万物は完成された。第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なさったので、第七の日を神は祝福し、聖別された。」

(旧約聖書創世記2章1節～3節)

このことにより、一般にすべての業を休むというのが、ユダヤ教の安息日を定めた律法で、律法の中でも重要なものとされました。イエス・キリストは安息日の律法を重んじられましたが、形式化した安息日にはあくまで自由で「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。」(マルコによる福音書2章27節)と言われ、安息日は平和と休息を記念するものであるゆえ、それを成就するような業をなすための日として、進んで人を癒し人間の幸福のために用いられました。しかしそのため、最も激しい摩擦がイエス・キリストと、当時律法を守ることを何よりも重んじた人々の間に生じました。

【イースター(復活祭)】

受難と十字架の死を通して復活されたイエス・キリストを記念する日であり、教会歴の中でもっとも重要な日です。この日が毎年同じ日でないのは、歴史的に、春分の後の最初の満月の次の日曜日とすることが定着したからです。イースターを祝うところでは「よみがえる」ことを意味して卵をゆでて、様々な絵や色をつけて配る習慣があったり、同時に長い冬が終わり、暖かい、明るい春が来たことをとも意味して祝い、パレードを行うところもあります。

【神とキリスト】

最近、政治の世界でも三位一体という言葉が使われますが、これはまさに「神・キリスト・聖霊(父・子・聖霊)」を表現する言葉として使われたのがその起源です。つまり三つの形をもっていますが、その本質は一つという意味です。3世紀以来、神は一つの本質と三つの「人格」であると言われてきました。また別な言いかたをしますと、神は本来的に、父、子、聖霊なる、唯一の神である、とも言います。

私たちの分かりやすい形で表現しますと、父なる神は我々人間のためにその独り子イ

イエス・キリストをこの世に送り(クリスマスの出来事)またそのイエス・キリストは最後には我々人間の罪のために十字架にかかって死んで下さった。そのために我々は罪から救われた、と言われていいます。どの教会に行っても十字架があるのは、最も残酷な死刑の手段である十字架刑の印でもあり、同時に、その独り子を犠牲にしてまで、我々人間を愛して下さい「自己犠牲の愛」の印でもあります。

【献金】

元来は金銭だけでなく、みずからの収入・所有物のうちから、物品などを神への感謝奉仕の精神をあらわすために捧げることを意味しました。

教会やワイズの礼拝での献金は、自分たちが「生かされて」いることに感謝し、そして捧げたものを神の意図されるご用のために「使っていただく」もので、広い意味からはクラブ例会での「ニコニコ」も、用いられ方によっては献金と言えなくもありません。

私達が奉仕クラブに参加していることは、精神的にも物質的にも恵まれた環境にあることであり、そのことだけでもすばらしく「幸せ」です。このことを感謝して、誰からも言われることなく、自分が喜んで捧げられる金額を献金したいものです。

「喜んで与える人を、神は愛してくださるからです」(コリント信徒への手紙9章6節)

【ゴスペル】

語源は「GOD + SPELL (神の綴り)」で、イエス・キリストの説いた神の救いと、神の国に関する福音のことをいいます。また、新約聖書のマタイ・マルコ・ルカ・ヨハネ4福音書の総称でもあります。

【ゴスペルソング】

20世紀前半のアメリカで、黒人霊歌とジャズが融合して生まれた宗教音楽で、たとえ聖書が読めなくても、楽しく軽快に聖書の教えが身につくように工夫されました。

福音歌とも言います。

【讃美歌】

神への「讃美」には、その最初から音楽が共にありました。聖書はその冒頭に、プロフェッショナルとしての音楽家の記述があります。古代の礼拝は現代以上に、音楽が重要な要素を占めていました。西洋・東洋を問わず「音楽の歴史は宗教と共にある」と言っても過言ではありません。

礼拝で讃美歌を歌うことは、心を素直にして神への感謝と讃美を、一緒に共有するということです。

【主の祈り】

「主の祈り」は、祈りの模範としてイエスが弟子たちに教えられたものです。の中にはキリスト教の「祈り」のエッセンスが全て含まれています。ですから、難しいことを考えずにとにかく祈ってみて下さい。「主の祈り」は祈りの生活への登竜門なのです。

【主の日】

「ある主の日のこと、わたしは“霊”に満たされていたが、後ろの方でラッパのように響く大声を聞いた。」(ヨハネの黙示録 1章10節)

イエス・キリストが復活された日(日曜日)を、教会は特に「主の日」として記念し、礼拝をしたことが始まりです。

【主のみ名において】

「天にましますわれらの父(神)よ」と祈り始める時、それは世界の主を表し、その神は義と愛の神を意味します。義の神とは我々の罪を裁き、厳しく罰せられる神です。同時にその神は愛の神でもあります。その独り子イエス・キリストを犠牲にしてまで、(イエス・キリストの十字架の死)我々人間を愛される神でもあります。いわばイエス・キリストは我々人間と父なる神の間に立ってとりなしされる存在です。それゆえ我々が祈る時、主イエス・キリストの名(その全存在を表す)を通して祈るように教えられているのです。新約聖書ヨハネによる福音書14章13節に、「わたしの名によって願うことは何でもかなえてあげよう」とあります。それゆえ私たちは祈りの最後に、この言葉を付け加えるのです。

【祝祷】

神様の「祝福」を、キリスト教のプロフェッショナルである資格を持っておられる「牧師」が神に取り持って下さることです。

【奨励】

説教が、聖書の言葉の解説(別項「説教」参照)という「学び」の意味を多く含んでいることに對し、もう少し一般的に「聖書の教えのおすすめ」という観点でお話することで、時間的に短い説教の場合や、主に教職者ではない信徒の話の時に使われます。

【聖書】

「聖書」は66巻の書からなっていて、創世記の「はじめに神は天と地を創造された」から始まり、黙示録の「わたしはまた、新しい天と新しい地を見た」で終わっています。そしてこれらは旧約聖書39巻と、新約聖書27巻に分かれています。この「約」というのは契約の「約」ということであり、神と人間との契約を意味しています。つまり古い契約が「旧約」であり、新しい契約が「新約」です。

聖書は多くの異なった時代の著者により書かれ、何世紀にもわたって編集されたものではありませんが、その各巻の背後には統一された原理があります。その原理とは、神が長い歴史を通じて人間の救いを計画し、この救いをキリストにおいて実現したところの神の意思であるとされています。

【旧約聖書】

旧約聖書には、神がイスラエル民族を通して人類に神ご自身を示そうとされた出来事がしるされています。すなわち「神は天地の創造者であり、人はその神の意志に従って

生きるときに祝福がある」という約束です。イエス・キリストの誕生以前の、イスラエル民族と神のことがヘブル語で書かれています。

【新約聖書】

神はイスラエルの中から救い主(イエス・キリスト)を誕生させ、彼を通して全世界に神ご自身を示して救いの道を開かれました。これが新しい契約です。

イエス・キリストの誕生と生涯、キリストと神のこと。そして十字架の死と復活の後の弟子たちの宣教のストーリーと教会の歴史がギリシャ語で書かれています。

【聖日】

初期のキリスト教信者(その多くはユダヤ人であった)は、金曜日の夕から土曜日の夕にいたる、ユダヤ教の「安息日」を引き続き守りましたが、後にキリストの復活を記念するものとして、週の第一日(日曜日)を「主の日」として祝うようになりました。そのうち「安息日」が「主の日」すなわち「聖日」として重んじ、礼拝する精神が受け継がれています。

【聖霊】

聖霊とは神の霊、神ご自身です。聖霊は旧約聖書の時代から存在していますが、キリスト教では、イエス・キリストの復活から50日後(ペンテコステ＝聖霊降臨日)の時から私達の中に存在し、働いておられます。聖霊は神ですから、聖書のことば、礼拝、祈りを通して私達に働かれ、神について、またイエス・キリストについて、わたしたちに明らかにしてくださるのです。

【説教】

「説教される」というと、何か悪いことをして、しかられるという印象がありますが、キリスト教で説教という場合、それは聖書のことばの解説(解き明かし)を意味します。新約聖書使徒言行録8章31節に、「手引きしてくれる人がなければ、どうして分かりますでしょう」と書かれているように、神の言葉・聖書を通してイエス・キリストの教えを知る手がかりとなるものです。私たちは身体のために食物をとります。それと同じように人間は霊的な存在ですから、霊的な糧、それが説教によって与えられるものです。しかし一定の専門的な、またかなり聖書の勉強をした人が説教をしますが、それでも「土の器」である人間のやることです。神の霊、聖霊のたすけによって説教がなされるのであって説教者の思想、信条、ましてや個人的な趣味や感想を語るのとは違うものです。

【福音】

(1)喜ばしい知らせ。喜びのおとずれ。

(2)イエス・キリストの十字架上の死と復活を通して示された救いの教え。

イエス・キリストによる人間の救いの道、または教え。神が人間の救いのためにイエス・キリストを通して与えて下さった未来への希望。これらはイエス・キリストご自身とは切り離せないもので、十字架と復活に具現化された神の愛を意味します。

【福音書】

イエス・キリストの言葉と行いを記した文章で、単なる伝記ではなく、イエス・キリストの死の意味を問い、その生と受難、死と復活に力点がおかれています。

新約聖書にはマタイ・マルコ・ルカ・ヨハネによる四つの福音書があります。

【預言者・預言】

キリスト教で使われる「預言者」とは、〈召された者〉という意味で、神から与えられたメッセージを告知する、「神の代言人」という意味です。ですから、例えばノストラダムスのような「未来や人生の予言」とは別のものです。

【律法】

律法とは、法律のようなものと解釈できないことはないのですが、法律と違って「神と人との間に交わされた契約」「正しく生きるための神の意志による教えといましめ」であり、これは旧約聖書の、モーセ五章(創世記・出エジプト記・レビ記・民数記・申命記)の中に、事細かに記載してあります。

律法の原語の「トーラ」が元来「教え」という意味を持っているように、律法は神の聖なる意志の啓示であり、そのような規定の背後には絶対的な神の要求があるとされ、これを守ること何にもまして大切なこととされています。

一度旧約聖書を開けて読んでみて下さい。「なるほど、契約とはつねにこういう形になるだろうな?」と、妙に納得してしまいます。

よく、欧米人、特にユダヤ系の人と重要な契約を結ぶと「電話帳位の厚さになる」と言われますが、ありとあらゆる場合を想定して完全に細かく規定すれば、そうなっても不思議はないのが良くわかります。

【礼拝】

キリスト教において礼拝とは「神様を崇め、神様に仕え、学び、互いに愛の交わりをすること」で、大変に大切な時です。

これは「クリスチャンだけの特権」とか「秘儀」ではなく、神様の前で互いに素直な気持ちで、神様の真理を学び、神様の恵みに感謝し、互いに心通わせ、互いの「愛」について思いを新たにします。

このことは「キリスト教を信じている、信じていない」ということを越えて、共に礼拝を守ることが、私達が他人への「愛」を持って生きるための基本となるのだ、と言うことを理解して下さい。

例会・集会で使うためのモデル祈祷(祈り)例

開会の祈り

- ① 天の父なる神様、心を同じくする私たちが〇〇 YMCA に集い、〇〇〇〇例会を開催することができますことを感謝いたします。

本日は〇〇の月であり、〇〇について学び、話し合おうとしています。神様がこの場に立ち賜うて、この会を祝し導いて下さいますようお願いいたします。また、私たちが YMCA と共に、この地域に、生きた奉仕をしていくことができますよう、力をお与え下さい。この会を初めより終りまでお守り下さいますようお願いいたします。

この感謝と祈りを、会を始めるに当たり、イエス・キリストの名によって、お祈りいたします。 アーメン

- ② 天の父なる神様、私たちをこの場所にお導き下さり、共にこの例会に参加出来ましたことを心から感謝いたします。

どうか、今日の会にあなたが共にいて下さり、始めから終りまでお守りお導き下さり、み心になった良き会にしてください。

今日卓話をされる〇〇さんに力をお与えください。参加している一人一人を豊に祝福してください。開会に当たり、この小さき祈り、主イエス・キリストのみ名を通してお祈りいたします。 アーメン

- ③ 天の父なる神様、今日もそれぞれが、あなたの守りの内に、それぞれの仕事を終え、また、ここに〇〇ワイズメンズクラブの例会に集うことができましたことを感謝いたします。

私たち〇〇ワイズメンズクラブは、〇〇 YMCA を支援していくために、志を同じくするものが集められていますが、どうぞ、今日の例会において、私たち仲間の交わりを一層深めることができますよう導いてください。そして私たちが心一つにして、奉仕に努めることができますよう、〇〇ワイズメンズクラブを強めてください。

また、私たち一人一人は、それぞれに異なった賜物をあなたから頂いておりますがそれらを一層強め、〇〇ワイズメンズクラブの活動に用いることができますように、一人一人を強めてください。

どうか今日の〇〇ワイズメンズクラブの例会を、始めから終りまで、あなたが祝してください。会を始めるにあたり、一言の祈りを、主イエス・キリストのみ名によってみ前におさげいたします。 アーメン

- ④ 在天の父なる神様、今日も一人一人の務めを終え、敬愛する友や仲間とこの会場に集うことが許され、感謝いたします。

私たちワイズメンはあなたに導かれ、YMCA を通して青少年育成、地域社会の発展のための働き人であることを感謝いたします。

今日は〇〇をお迎えしての例会です。このひと時を共にいてくださり、導き、有益な

ものにしてください。この場にいない友や仲間の上に、あなたの大きななぐさめと励ましがありますように。

開会にあたり、この感謝と願いを、一人一人の祈りと共に主イエス・キリストのみ名を通してみ前におさげいたします。アーメン

- ⑤ ご在天の父なる神様、一日の仕事を終え、〇〇クラブの例会に良き友と共に集うことができましたことを心から感謝いたします。本日はゲストの〇〇様から「〇〇〇」というお話をうかがうことになっています。この会が最初から最後まであなたの豊かな祝福の下で進められますようにお守りください。本日都合で集えなかった友にも祝福がありますように。この小さき祈りと感謝を、主イエス・キリストのみ名を通しておさげいたします。アーメン

開会と食前の祈り

- ① 天の父なる神様、今日も私たちを〇〇ワイズメンズクラブの例会に導いてくださいましたことを心から感謝いたします。

きょう私たちは〇〇ワイズメンズクラブの例会において「〇〇」についての話を聞くとしております。どうぞ話されます〇〇さんをあなたが祝福してください。

ただいまから、共に食事を頂こうとしております。世界では多くの人たちが飲む水に困り、また、食べるものが乏しく、飢えに苦しんでおられることを覚えます。豊に備えられたこの糧を心から感謝していただきます。どうぞこの糧によって健康が備えられ、新しい力を得、ご用のために十分な働きができますように強めてください。

この小さな祈りを主イエス・キリストのみ名により、み前におさげいたします。アーメン

- ② 天の父なる神様、それぞれの仕事を終え共に集い、ワイズメンズクラブの例会を開催することができますことを感謝いたします。本日の例会はゲストスピーカーに〇〇氏をお招きし、お話を伺いしようとしています。〇〇氏を祝してくださいますようお願いいたします。これから、備えられました食事を共にいただきます。感謝していただくことができますように。また、色々な事情でこの例会に集えない友を覚えますが、その場にありまして同じ恵みがありますようにお祈りいたします。

この感謝と願いを、会を始めるにあたり、主イエス・キリストの名によってお祈りいたします。アーメン

食前の祈り

- ① 在天の父なる神様、日々あなたの守りの内にいますことを感謝いたします。今、多くの国々で幼い子供たちが飢餓の危機にさらされ、尊い命を失っています。同じ地球に生きるものとしてその痛みを分かち合い、心をつにつにすることができますように。

また、私たち一人一人がこれらのことから目をそむけることなく、何をなすべきか知

らしめてください。

ただいまから食事をいただきますが、感謝して食し、私たちの血となり、肉となってあなたのご用の役立つことができますように。それぞれの留守を守るご家族の上にもあなたの恵みと導きがありますように。主イエス・キリストのみ名によってお祈りいたします。アーメン

- ② 天の父なる神様、本日の例会を感謝いたします。世界の各地では災害や争いにより多くの人々が飢え、苦しんでいます。このようなことをいつもおぼえていることができますように。

ただいま、豊かな食事が備えられました。感謝していただくことができますように。この感謝と願いをイエス・キリストの名によってお祈りいたします。アーメン

- ③ 天の父なる神様、この会に私たちを集めてくださり、素晴らしい交わりの時を与えてくださったことを感謝いたします。ただ今から、夕食をいただきますが、どうかこれを祝福し、私たちの心と体を養ってください。この小さき祈り、主イエス・キリストのみ名によっておさげいたします。アーメン

- ④ ご在天の父なる神様、一日の仕事を終え〇〇クラブの例会に集うことができたことを感謝いたします。これから食事をいただきます。食事を通して私たちの心と体の健康をお守りください。この小さき祈りと感謝を、主イエス・キリストのみ名を通しておさげいたします。アーメン